

第 14 回京都建築賞 <藤井厚二賞部門> テーマ意見交換会

日時 令和 7 年 11 月 20 日

出席 審査委員（50 音順） 奥谷 繁礼、駒井 貞治、松隈 章
顕彰制度特別委員会 篠、藤原、米沢

松隈：審査をする上で、藤井厚二の思いを皆さんに伝えつつ、そこをちゃんと学んでいってほしいなと思っています。藤井厚二について改めて説明しますが今、兵庫県立美術館で「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920 s - 1970 s」という展示をやっていて、館長との対談イベントがありました。その時に話した内容になりますが、「日本の住宅」という藤井の書いた本の中に、「住宅とは単に構造が堅牢にして震火風雨及び腐朽等に対して安全であり且つ生存に必要になる衛生的の諸種の条件を完全に満たしたるだけでは不十分」で、「精神上にも慰安を与え、各人の性情に適応したる愉快なもの」でないといけないと書いています。住んで楽しくなきゃいけないっていうのが彼の考え方で、そのためには構造的にも機能的にも環境的にも全部揃わないと楽しくならない。ということが、実は最上位のコンセプトなのでないかと最近思っています。

次にですね、藤井厚二は自邸を 5 回も建てています。1 回目に建てた住宅について「住宅をもっともっと愉快な便利なそして楽しいものにしたい」と思って建てたと書いています。けれど「物足らぬ点が沢山ありました。」ともしています。そこで従来の住宅を姑息に改良しても駄目で、思い切って根本的に改良しなきゃいけない。それにはまず欧米の生活を見て気候風土を調べなきゃいけないと書いています。そして欧米視察に行く決心をするわけです。

また、藤井厚二是 1934 年、37 年に講演会でル・コルビュジエを批判していたという文章が残っています。（ル・コルビュジエは）「住宅は住むための機械」と言っていて、この言い表し方が旧来のものとは異なり、耳新しく、世の注目を引き、我が国においても一種の流行語になっていて、若い人は喜々として涙流しているが、しかし特に住宅に対して新に必要条件を提示したのではないということで、ある意味批判しています。藤井は日本の気候風土とか日本人の感性に合わせるということが住宅にとって大事だから、そんなどこでも成り立つような機械みたいなものではないということを主張していたのであると、神戸大学の安田徹也先生は解説として加えています。

藤井がやろうとしていたこととして、日本の住宅のスタンダードな様式・かたちを追求し普及をしようとしていたということがわかるのが、「住宅に就いて三」という著書で 15 坪から 19 坪の 7 種類のプランをまとめたプラン集です。注目して欲しいのは平面の大きさが違うんですけど、真壁・腰板張り・漆喰壁・黒い瓦屋根というエレベーションは全部一緒なんです。ところが聴竹居だけは大壁で横連窓で銅板屋根で水平に近い屋根にしている。これは明らかに聴竹居は世界に売って出るデザインだった。一方で藤井がやろうとしていたこ

ととしてふつうの「日本の住宅」としてデザインした注文住宅は上述したデザインを繰り返して並ぶのが、京都の町屋のように風景を作っていくんだということで、こういうコンパクトな住宅を普及するっていうのが本来の彼のあり方だったんだと思っています。

最後に、藤井が創りあげた「新しくも懐かしい空間」というのは、何がそうさせているのかという点を5つあげます。1つ目は「独立しつつも拡げることが可変可能な引き戸を採用した空間」で日本の伝統的な引き戸を使って空間を繋げたり、開いたり、閉じたりできるようになっています。一方で常時閉じておくところはちゃんと開き扉で閉じてもいます。2つ目は「斜め45度に視界が開け繋がる新しい空間」です。斜めに視界が広がるという空間を聴竹居ではつくりついて、食事室や、角に柱がない縁側もそうですが、これは元々の日本の空間にはない目線です。3つ目は「和（日本）のプロポーションを大事にした空間」です。藤井厚二が面白いのは、メートルで設計しているんだけどプロポーションはやっぱり和風をちゃんと守っている。4つ目が「適度な「間」を設けた室内空間です。空間に「間」が存在しているということが日本的なつくり方じゃないかと思っています。5つ目がフランク・ロイド・ライトにも言えるんですけど、やはり「大地から建ちあがり自然と一体化した空間」ということを非常に大事にしていることだと思います。自然から建ちあがる。そして素材も実は自然のものしか使ってない。コンクリートの布基礎以外は自然なものを全部使っているということですね。「本屋」の布基礎はコンクリートに自然石を組み込んでいるっていうところが特徴的ですね。「茶室」では普通は傾斜地に立てる場合は柱でピロティにするところを地面まで壁が下りているっていうのもこういうことなのかなと思っています。

”愉快に” ”便利に” ”楽しく” 暮らすというのが藤井の大事な考え方で、そのために椅子の生活と畳と共に存させるとか、家電によって家事労働を軽減するとか、茶室に変わると新しいビルディングタイプとしていろんなことができる閑室をつくっています。床の間ももともとの床の間と違っていて、洋間にも床の間まで含めて設えるというようなことをやって新しい日本の住宅をつくろうとしたっていうことですね。そして「日本の住宅は壮大で感動的な様子は持たない。ただ、見るもの全てに慕われるような魅力がある。」と言いかつてるんですよね。だから、決して欧米みたいなデザイン特化の住宅をつくることを目指してはいなくて、家族と楽しく暮らすとこが最上位のコンセプトであるということです。そして「外部に対して閉じたハコではなく、人の営みと自然とつなぐデザインがその基本である」ということが、もう1つのモダニズムではないかというふうに書いています。

ということで、こんなことをやった人が藤井厚二だっていう取りまとめです。いま話したなかで「愉しむ」というのは非常に私は大事だとは思っていて、家族が楽しんで暮らすということを最上位に考えている気がするんですよね。

龜谷：そこは重要な気がしています。先程の話の中に「普通」ってありましたよね。それで、いいなと思ったのが「あたらしい普通」。「新しい」けど「奇抜なもの」じゃしょうがなくて、その先に普通になるものがあるのではないかと思います。

松隈：新しいスタンダードをつくろうとした人だなという感じがしていて実は、「100 年前の最先端住宅」と私は言っています。藤井は若くして亡くなっていて 40 歳で他界しています。

駒井：若くしてその域に達しているのはすごいですね。

松隈：「聴竹居」が 40 歳のデザインですからね。私たちはここ 5 年ぐらい聴竹居の保存修理をやってきました。藤井厚二のやっていないところも整備してきましたが竹中工務店の設計部の人間としては、藤井厚二が生きてたらこんなデザインしないだろうっていうことは絶対やっちゃいけないなということで整備しています。

魚谷：ガウディ的ですね。

駒井：本人は亡くなっているけど、その思いを継ぐ人が次から次へと現れているということですね。

松隈：だからこの賞の意味というのはそこにあるんじゃないかと思っています。藤井は若くして亡くなってしまったけれどその意思を継いで現代でも新しく次の 100 年に向けて最先端の建物をつくってくれる人が出てこいかなと。



駒井：今日の話を聞いて自分が受賞した理由が良く分かりました。住んでる人が楽しんでもらうから。そして何回もやっている。今、私がやっていることでハウスメーカーがつくるものであっても、やはり日本の住宅はこうあるべきだっていう風になっていった方がいいと考えていて、そこにやっぱり建築家は関わるべきだっていう思いがあります。スタンダードをつくりたいっていうか、みんなが手に入れる家で一番多いのが、ハウスメーカーの家なんだったら、そのメーカーが日本のこれから家のつくっていくっていう意識でつくらないと、日本の家が良くならないなと考えています。

松隈：実は、ハウスメーカーが、聴竹居で数年前から 1 日研修を続けているんですよ。

その時にも、今日したような話をするんです。

駒井：藤井厚二賞を目指して取るようなハウスメーカーが現れたら、それは本当の日本の100年後のスタンダードになるかもしれないなっていうのも考えたりします。これからスタンダードをつくるのは建築家じゃなくて、ハウスメーカーとか地域の工務店じゃないかなっていうようなことを勝手に思ってたりしています。これからの日本のスタンダードをつくろうとしていたというのが現れるテーマがいいと思います。楽しいっていうのも、その1つのキーワードになると思っています。

奥谷：応募できる作品を制限するようなテーマではない方が良いと思っています。

ベクトルだけ示すという感じが良いだろうと。ベクトルがみんな揃っていけば、多分そこでも評価しやすいと考えています。

松隈：駒井さんは応募するときテーマをどう受け取ったんですか？

駒井：どんなテーマであろうとも応募しようとは決まっていたんです。テーマを見たら「破る」ってなっていたから、これはいける。それは常に考えてることだから、まさにぴったりだなと思いました。

奥谷：以前に木村松本さんが受賞した時はもう一つの作品と悩んだんですが、最終的には、建築としてどちらがいいかじやなくて、藤井厚二賞としてどちらがいいかという点で、やはり新しいチャレンジをしてる方がいいんじゃないかというところで、設計手法やモジュールとかというところにチャレンジがあるのではないかというところで選びました。前回は森田さんが受賞したのですが、最後2作品に絞った時に、「突き抜ける執着」というテーマでどこに執着が見えるかっていう時に、どちらにも執着は見えたんだけど、森田さんの作品の敷地に正方形を置くその置き方も含めてその執着が突き抜けているんだというところが決め手になりました。

今回のテーマですが1つは、「あたらしい普通」というのがいいと思っています。もう1つ「楽しい」でいくとしたら楽しいだけでいいのか。何が楽しいとか、楽しい何々とかにしても良いかと思っています。

駒井：「楽しい」は割と制約にもならないけどどうですか？

松隈：「楽しい」もあるけど、「愉快」もありますよね。

奥谷：「愉快」も良いですよね。8回目が「愉快な環境」でしたけれども、環境に限った話じゃないわけだから。

駒井：「楽しい」か「愉快」というテーマになった時は、それがこれからのあたらしい普通になっていくっていう説明をつけたらいいっていう感じじゃないですかね。その時だけ楽しいんじやなくて、プロトタイプじゃないですけどそれがスタンダードになるっていう。

松隈：おそらく藤井は新しい愉快っていうか、楽しさをつくろうとしたと思うんですよ。

藤井が求めたものの1つではあると思います。

奥谷：新しい愉快って言われると難しいですね。

松隈：難しいですよね。すごくひねりが入ってる。

亀谷：「あたらしい普通」で、その中にキーワードとして「愉快」が入っているということはどうでしょうか。応募する人はテーマを決める意見交換会の資料を見るわけですから。

駒井：現地審査に行ったら、住んでいる人もそこにおられるわけだけど、愉快かどうかを感じ取れると良いですよね。

松隈：住宅はもちろん大事ですけど、住宅じゃない世界まで広がっているといいと思いますけどね。例えばオフィスでも、「愉快」とか「楽しい」っていうのはすごく大事だと思いませんから。

亀谷：でも気を付けなきゃいけないところは愉快なのが、建築が愉快じゃなくて、暮らして人が愉快ということもあること。建築は普通だけど、施主がすごく変わってて楽しそうに感じてたらっていうのを評価するわけじゃないわけだから。

駒井：新しい愉快を生む建築をちゃんとつくっているかどうかっていうことですよね。

亀谷：「あたらしい普通」それはおそらく愉快なものなんじゃないでしょうか？

松隈：愉快というか、つまらないものじゃないはずですよね。普通ってなにかつまらないっていうワードに繋がりやすいじゃないですか。つまらないんじゃなくて、「あたらしい普通」は愉快なんだよと。

亀谷：「あたらしい普通」っていうのは、まさに藤井厚二がやろうとしていた、つくろうとしていたものだし、やっぱりそういう建築はいつの時代だって求められてると思うし、そういうものにこそ、賞を与えられるものなんだと思います。

駒井：「あたらしい普通」っていう最高の賞、「あたらしい普通」にたどり着いたっていうのは最高の栄誉だっていう風にすればいいですね。

松隈：無印良品なんかも考え方が近いとこもありますよね。新しいスタンダードをつくろうとしてるのが無印の考え方なので。あるいは昔で言うと民芸なんかの考え方も近くて、やっぱり普通なんだけど優れてるみたいなところを見いだしたのが柳宗悦なので。それも藤井の時代と一緒にからっていうのを僕は最近言ってるんです。「民藝」という言葉も誕生して今年100年なんですね。

建築士会：意見がだいたいまとまったと思います。では今回の藤井厚二賞の応募テーマは「あたらしい普通」でいきましょう。